大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

端午節に見る中国の民間信仰

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 燕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004392

端午節に見る中国の民間信仰

張　　燕

はじめに

年中行事は四季の移り変わりや自然の動きを基本原理とし、その上に民族の基本的な生活様式によって規制され、一種の「生活のリズム」として作り上げられてきた、最も民衆の日常生活に密着している文化事象である。自然・風土・季節という自然条件と固有民俗信仰に大きく関わっているのである。その根底に伝統的な文化精神が潜在されている。

中国では奇数を陽数として重んじたため、その奇数の重なる月日を節句とした。三月三日の上巳節、五月五日の端午節、七月七日の七夕節、九月九日の重陽節等がそれである。これらの伝統的な年中行事は歴史の変遷と共に内容や性格に様々な変化が現れた。今日まで持続されたものもあるが、次第に衰えてそれに代わって時代の要求に合った新しい行事が変容したものもある。

端午節は千年以上の長い伝統がある。五月五日が固定した節日となったのは漢代以前からであるが、今日でも中国では、粽の食用や競渡や不詳を祓う習俗が行われ、ずっと受け継がれているのである。その由来は屈原を記念するためだという俗説が今でも残っている。

「人と天」「人と自然」の関係を重んじている中国の年中行事においてはその歳時文化の本源を探る必要がある。拙稿では端午節の起源を検証して、この行事においては中国の先民がどのような信仰文化を持っているのか、そして、道教信仰がこの行事にどのような影響を与えてきたのかを考察したい。更に、この行事の組み込まれた屈原の事跡から中国の民衆にどのような精神文化が反映されているのかを解明してみたい。

一、端午の名称とその起源

五月五日は端午のほかに端五・重午・重五・端陽・浴蘭節・天中節等いくつかの別名がある。その中で古くから、よく知られているのは端午と端五である。

「端」は始めという意味である。晋の周処の『風土記』に

仲夏端午･･･註に言う。端、始めなり。五月の初めの五を謂うなり。･･･[1]とある。

古くから午と五が発音も字義も通用した（『周礼』壺涿氏鄭玄注に「午は五となす」とある）。漢以後から五月五日に変わり、端五とも称されるようになった。午月午日と五月五日は午と五が二つ重なったので「重午」、「重五」とも呼ばれた。また午すなわち五が奇数すなわち陽数できっちり陽がそろっているという意味で端陽とも称された。

端午のもう一つの古称は「浴蘭節」である。「五月五日、之を浴蘭節と言う」とある（『荊楚歳時記』）。この名は最初に『大戴礼記』巻二「夏小正」の条にみえる[2]。「午日、蘭を蓄え沐浴を為すなり」とあるので「浴蘭節」は古時から伝えられてきた名称である。

宋代より見られる「天中節」も端午の別名である。これは月日時のすべてが一三五七九の天数（奇数）の中央たる五にあたることをもって「天中節」と称したのである。この解釈は後世のものである（『歳時広記』夏令天中所引『提要録』）。

明代の北京ではこの日を「女児節」とも称した。明の沈榜の『宛署雑記』民風には「五月女児節」の本文のほか、注に五月一日から五日までが女児節で、少女達は飾り立て、嫁した女は実家に帰るから女児節というといい、五毒符[3]をかんざしにすることもいっている。

端午の起源にはいくつかの説がある。梁の呉均の『続斉諧記』、『荊楚歳時記』によれば、端午節は屈原を祭るために起こったとされる。これはただの俗説であるが、人々の心の中に定着して語り伝えられているのである。

晋の周処の『風土記』に

> ･･･俗、五日を重んず。五月五日、夏至と同じ。…

と見える（『玉燭宝典』巻五所引）。

ここに端午の本質は夏至の祭りだということが分かる。中国の陰暦は漢の武帝以後、招揺（北斗七星の斗柄上の第七星）が寅の方角を指す時を正月とした（『淮南子』時則訓による）。寅を正月とする暦を夏暦という。夏暦の五月は仲夏であって招揺はちょうど午の方角をさしているので「午」とも称された。そして夏至はこの月にあり、日もほぼその月の午の日あたりになっている。夏至は太陽が高く天中にかかり、日がもっとも長い日である。そしてこの日の正午を境に日は短くなりはじめる。陰陽的観念から見ると、夏至つまり午月午日午時ときっちり午がそろう端午こそは陰と陽の分岐点である。陽気から陰気へ、言い換えれば「盛」から「衰」に変わる分岐点である。「陰陽争い、生死分か

る」（『礼記』月令）はまさにそのことをさす。

これとは別に、「五月を悪月と称し、禁多し」（『荊楚歳時記』）という考え方もある。これは陽があまりにも強すぎることから、陰陽の調和が崩れて悪月となるという考え方であろう。

古来、五月五日生まれの子は長じて自害するか或いは親に害を与えるという言い伝えもある。『史記』巻七五孟嘗君列伝には「文（後の孟嘗君）、五月五日を以て生まる。嬰、其の母に告げて曰く、挙（養育の意）ぐる勿かれと。其の母、窃かに之れを挙げ生（そだ）つ。長ずるに及び、其の母、兄弟に因って其の子の文を田嬰に見えしむ。田嬰、其の母に怒って曰く。吾れ、若をして此の子を去（す）てしむ。而るに敢えて之れを生だつるは何ぞやと。文、頓首して因りて曰く、君、五月の子を挙げざる所以は何の故ぞと。嬰曰く、『五月の子は長じて戸と斉しくならば、将に其の父母に利あらざらんとす』と[4]」とあり、古く戦国時代に五月生まれの子は成人すると父母を害すると言う俗信のあったことを示している。

二、先民における原始信仰

陰暦の五月は、南方においては梅雨の季節で悪疫発生の時期である。「陰陽争い、死生分る」（『礼記』月令）、「五月を悪月と称し、禁多し」（『荊楚歳時記』五月の条）と言うように、五月は悪疫害毒等の人為をもって防ぎがたい障害が顕著に現れる時期である。先民、特に農耕時代に入っている先民にとっては、太陽運行等の天象は生活に密着していたのである。盛から衰に変わる日、つまり陽気が衰え始める時期、陰気と結びつける悪魔、病害が動き出すと思われ、様々な習俗が先民の信仰が見られる。

１、水神加護への祈願－競渡

競渡は古くから端午において行われていた盛大な行事である。『荊楚歳時記』五月五日に「この日、競渡す」とある。競渡はボートレースのことである。競渡のことを記録した最古の史料は南斉の劉澄之の『鄱陽記』（『太平御覧』巻六十六所引）である。競渡の起源については『鄱陽記』に、

> 俗に云う、屈原のために災を攘う。

とみえる。

次いで『荊楚歳時記』の注に、

俗に、屈原汨羅[5] に投ずる日、その死所を傷み、故に並びに舟楫に命じて以て之を拯うと為す。

とみえる。

これらはともに戦国時代の愛国詩人、楚の屈原の故事と結び付けている。屈原は楚の懐王に疎んじられて、江南地方を流浪し汨羅水に身を投げた。屈原を尊敬していた楚の人たちは彼の死を悲しみ、せめて遺体だけでも探し出したいと思った。そして船を出して川底を探したが遺体の行方は分からなかった。以後、毎年、人々は屈原の命日に舟を浮かべて川底を探し、年月が経つにつれて、龍舟競渡になった、という。もちろん、屈原の遺体を救うために競渡するとされるのは俗説である。競渡の起源には、様々な説があり、断定はできないが、もっとも有力な説は、雨乞いの儀礼だとするものである。

五月の初めは雨季を迎えて田植えの始まる時期である。『礼記』月令篇では、山川に対して雨乞いを行い、豊穣を祈る時とされている[6] 。競渡に用いる舟は龍の形が多いので、龍と深い関係があるといえるだろう。「『山海経』に見える応龍や燭龍などの古い伝説では、すでに龍は雨を降らせる神性を持っていた[7]」。また『淮南子』には土龍を造って雨乞いをしたという記事もあり、漢代に龍が雨を司るという考え方はすでに一般的であったと思われる。龍の本体は水と雨を司る水神であろう。競渡は龍神の祭として、「競渡は互いに競って雨を呼び、水を起こす龍の形をかたどった物かもしれない[8]」とされ、また「競渡における賑やかな歓呼の声が水中の龍を驚かせ、ひいては雨を招くと信じられたかもしれない[9] 」といわれている。おそらく本来は水神である龍を呼び起こして雨乞いをする行事なのであろう。

２、色彩の運用

①朱索・五色印

端午における辟邪物として最も古いものは、漢の時代に見られる「朱索」と「五色印」である。いずれも門戸に飾る。「朱索」の「索」は絹糸で組んだ紐のことで、朱色は赤い色で古くから生命の源とされる血を象徴して、邪悪を払う力が大きいとされる。「朱索」は門から入り込もうとする悪鬼を縛り上げてしまうためのものであろう。五色印とは桃木の板を五色（五方を代表する青、赤、白、黒、黄の五色）に染めたものである。この桃木の板は、正月に悪鬼の侵入を防ぐために掲げたものである。

『後漢書』礼儀志中に、

夏至、陰気萌し起こり、物の楙（しげ）らざるを恐れ…中略…、故に五月五日をもって朱索・五色印を門戸の飾となし、以て悪気を難（はば）み止む[10]。

とあり、仲夏五月は万物盛んとなる時期で、陰気が起こり、物の生え茂らないのを恐れ、この日に「朱索」・「五色印」を門戸に飾り悪気を儺止するという。「朱索」・「五色印」は邪悪を払う力があると信じられたのである。

②五綵糸

五綵の糸を臂（うで）に懸けることは後漢時代にみえる。後漢末の応劭の『風俗通』に

五月五日、五綵の糸を以て臂にかけ、鬼を辟くれば、人をして瘟を病まざらしむ[11]。（『事物紀原』巻八、五綵所引）

とあり、五綵糸を臂にかければ疫病をはらうことができると考えられた。五綵糸は長命縷・続命縷とも言われる。魏の董勛の『問礼俗』に「夏至、長命縷を上（たてまつ）る」（『玉燭宝典』所引）とあり、晋の周処の『風土記』に「朱索、一名、続命縷」と記してある。朱索に悪鬼を避け、悪疫をはらう力があるため、寿命を延ばす長命縷・続命縷と呼ばれたのであろう。

３、植物の利用－除悪辟邪

①　蘭－浴蘭

『楚辞』九歌･雲中君篇に、

蘭湯に浴し芳に沐す。

とある。これは祭をおこなう者の潔斎のさまを歌っている。蘭はふじばかまをいう。

『大戴礼』巻二「夏小正」の条に、

五月五日、蘭を蓄え、沐浴を為すなり。

という記事があり、蘭の湯を浴びることはかなり古い時代から行われていたようである。『荊楚歳時記』に「五月五日、之を浴蘭節と謂う」とあり、六朝時代にも浴蘭の風習が受け継がれていたことははっきりしている。　病気が起こりやすい仲夏五月の時期に、辟邪、辟病の為に、蘭の持つ芳香が邪気を辟けると信じられ、蘭を蓄え、沐浴を為すとの習俗が生まれてきたと考えられる。

② 艾－艾人

艾は、古くから灸に用いられた体内の毒気を取り去るとされた薬草である[12]。この艾で作った人形すなわち艾人は晋代に初めて現れた。

『荊楚歳時記』五月五日の条に、

艾を採り以て人と為し、門戸の上に懸けて、以て毒気を払う。

とある。

悪疫をもたらしやすい五月こそが悪気を払う時期であった。薬用に供する艾は、辟邪用の呪物として人形に作られ、門戸に懸けられた。艾は元旦の桃の枝、清明の柳と同様に、端午節に不可欠な悪疫を祓う重要なものだと認識されていたのである。

③ 薬草－薬草摘み

『荊楚歳時記』に「五月五日、四民並びに蹋百草の戯あり。…是の日、雑薬を採る」とあり、端午の日に民は薬草を摘みに出かけると言っている。ここで「百草、雑薬」と書いてあるが具体的にどのようなものかは記されていない。しかし前に述べた内容から見ると端午には辟邪の為に蘭以外に艾、菖蒲等も使われていて、これらの薬草を採らなければならないということになる。百草の中で特に艾の用途が一番広いと見える。『荊楚歳時記』に「端午、艾を採りて門戸上に懸け、以て毒気を祓う」とみえ、注に「常に五月五日、鶏まだ鳴かざる時を以って艾を採り、人に似たる処を見、攬めて之を取り、灸に用いるに験あり」とある。五日に採った艾にこそ効き目があるらしい。

④ 菰の葉－粽の食用

粽は「糉」の俗字で古くは「角黍」と書く。粽に関する記載が最初に見えるのは晋の周処の『風土記』である。

仲夏端午…　米を裹むに一は糉と名づけ、一は角黍と名づく。蓋し陰陽の尚お相い苞裹し、まだ分散せざるの象を取るなり[13]。(『玉燭宝典』巻五所引)

という。

ここに「陰陽の尚お相い苞裹し」とされているように、粽は陽極まり陰萌す夏至に用いられ、この季節の重要な象徴であったことがわかる。『荊楚歳時記』に「夏至節の日、糉を食らう」と言い、粽は本来、夏至の節に食べるものであり、後に端午の節に食べるようになったとされる。

粽の造り方であるが、『風土記』では、もち米に粟を雑ぜ、菰の葉で巻いて、これを濃い灰汁で煮熟した物がある。菰の葉で包むということであるが、菰の異称は茭草である。これは『続漢書』「礼儀志」の儺の注に見える。そこでは神荼が悪鬼を縛り上げるシメナワとして葦茭を使用していた。また粽子は角の形をし、先端が尖っているため、武器として悪霊を脅すためのものではないかとも思われる。

年中行事というものは生活の中から生み出されたもので、その背景には宗教信仰的な意識があったのである。先民、特に農耕時代に入っている先民にとっては、農業神の神意が得なければ、自然の運行と農作との調和が得られないという考えたが強いである。五月は陰気が動き始め、陽気と争い、悪いことが起こりやすいとされる。災害を鎮めるため、水神を祭るような呪術的が儀礼が行われていたのである。また、色彩や植物を利用する行事内容も様々な邪気を祓うためにされたのだと考えられる。

三、道教信仰から端午への影響

道教は中国の代表的で、固有の民族文化である。それは漢時代以前の呪術民間信仰などが基盤となって、後漢末から六朝時代にかけて形成されたと思われている。その中で、張道陵という後漢末の道士で、後に尊ばれて天師と称された人物がいた。

『夢粱録』五月に「艾と百草を以て、天師を縛成し、門額の上に懸く」とみえる。天師が後漢末に天師道を布教し、符水を与え、祈祷を行って病人を治療した道教の祖師で、張道陵のことである。

ここから見ると、宋の頃、「艾人」から「天師像」が生じた。また蘇轍の「皇太妃閤端午帖子」に「太医は争いて献ず天師艾、瑞霧は長く縈（めぐ）る尭母門」とあって、艾人を天師の像と称したことがわかる。

その後、天師の画像や泥人形も生じた。宋の『歳時雑記』に、

> 端五に都人、天師像を書いて以て売り、泥を合わせて張天師を作り、艾を以って頭と為し、蒜を以って拳と為し、門戸の上に置く[14]。(『歳時広記』画天師所引)

とみえる。

張天師の画像と艾を結んで頭とする泥の張天師が端午に用いられたのである。この泥人形は艾人の痕跡を残していたが、天師の画像の方は、その後も独立した門戸の飾として清代まで用いられていた。さらには「天師」の二字だけを書いたものも現れた。これらは画像も含めて「天師符」と呼ばれ、街でも売られていて、人々は争ってこれを買い求めた。

『燕京歳時記』五月に「毎年、端陽になると、市肆において尺幅の黄色の紙を用い、これを朱印を押し、その下辺にあるいは天師や鐘馗の像、あるいは五毒の図や符呪の形を画いて、吊り下げて売る[15]」とあって、清代に北京において「天師符」が禍を避ける霊符として用いられたのである。

菖蒲は香りのつよい薬草である[16]。宋代以来、菖蒲は瘟気・邪気を辟ける飾り物として用いられた。『山堂肆考』宮集、巻十一、刻菖に、

> 歳時記。端午、菖蒲を刻んで小人子を為る。或いは胡蘆形を謂う。之れを帯びて邪を辟く。

とみえる(『荊楚歳時記』, 守屋美都雄訳注, 菖蒲の所引, 146頁)。

また『夢粱録』の重午節に、

> 内司意思局、紅紗を以て金彖子(こばこ)を彩り、菖蒲或いは通草を以て天師馭虎の像を中に彫刻(きざ)み、四囲は五色に染めたる菖蒲を以て左右に懸囲す[17]。

とみえ、菖蒲で天師馭虎の像を作り、辟邪の飾り物として用いたことがわかる。

行事は生きているものである。社会経済の発展・歴史文化の推移・社会情勢の需要によって、行事内容の変化もしてくる。宋以後、艾人の姿はあまり見かけなくなってきた。天師の画像、天師の菖蒲像及び天師符は独立した門戸の飾として清代まで用いられている。明らかに道教からの影響があったことがわかる。

四、英雄愛国精神との結合

粽と競渡は、端午の中で最も有名で普遍性を持っている行事である。この二つの行事の起源が、みな屈原の投身に結び付けられ、端午節の由来までも屈原を記念するためだと言う俗説は今でも残っている。『史記』巻八十四に屈原の列伝がある。楚の貴族だった屈原は政治・外交に明るく、有能な政治家として活躍したが、妬まれて楚の王に江南に流されていた。前二七七年、秦兵が南下し楚は滅亡したが、このとき屈原は汨羅の川に身を投じて国に殉じたのである。屈原の作品は『楚辞』の中に納めてある。屈原が汨羅に投身したことは事実であるが、『史記』に、彼の命日が五月五日だということは何も記されていない。そして粽のことは最初に晋の『風土記』に見えるが、屈原に結びつくことは一切書かれていない。しかし、梁の呉均の『続斉諧記』によれば、屈原が五月五日に汨羅水に投じて、楚の人たちは彼の死を悲しみ、この日に至れば粽を水に投じて屈原を祭ったと記される。これは明らかに、後に起きた俗説で、歴史的事実ではない。

また競渡のことであるが、屈原を救うために競渡が行われたという俗説も有名である。もちろん、これもただの俗説で信用するに足りない。端午節における他の行事の内容を見ても屈原とのかかわりは一つも見つからない。それではなぜ端午節が屈原を祭るために起こったという説が、人々の心の中に定着して語り伝えられてきたのだろうか。何よりも屈原の愛国行動であろう。楚は滅亡したあと、屈原は川に身を投じて国に殉じたとされるのである。もちろん屈原の主要な作品である『離騒』は当時の統治階級に対して彼の失意を述べ、当時苦しい状況に生活している人民に大きな慰めを与えたが屈原の偉大な人格と愛国精神は人民の心に最も多大な影響を与えていた。屈原は自由と正義、忠君愛国の代表人物として人民に深く尊敬され愛されていた。

おわりに

旧暦の五月は夏の初めで次第に暑さを増し、雨が多くなって、昔から悪月と言われるほど悪疫害毒など人為をもって、防ぎがたい障害が顕著に現れる季節であった。『禮記』に、この月には、日の長きこと極まり、陰陽争い、死生分かるとあるように、陰と陽の分岐点として重要視されたのである。したがって生命の安全を保証するために、さまざまな魔よけにかかわる行事が行われる。これが「端午節」に集中的に現れる。つまり端午節はその諸風習がほとんど邪気祓いを中心に展開される一種の駆疫の節句である。

駆疫に関わる様々な習俗から先民の自然を尊重し、人と自然の調和と共存を願う、応

天応時の信仰が窺われる。また、命を重んじ、命を大切にする原始的な一面も見られる。

風俗習慣は固定したものではなく、絶えず変化していく。端午節も時代とともに変化を遂げてきたのである。思想の変化すなわち道教信仰の出現は原始諸神を同化させ、この伝統的な行事内容を豊富させ、行事の伝承発展と持続性に影響を与えた。

端午節は戦国時代の愛国詩人屈原の伝説を伴うことによって広く親しまれ、民間においては屈原を讃える行事として古くから行われてきた。中国民衆は早くから英雄を崇拝し、愛国精神を重要な精神理念として心中に植え込んでいることも窺える。

注

1　『風土記』曰：“仲夏端五……端、始也、謂五月初五日也……。”

2　『大戴礼』前漢の人、戴徳が撰じた、周末・秦・漢の礼の制度や礼家の説を集めたものである。もと85篇あったが現在は四十篇を残す。(『大戴礼記』、栗原圭介、明治書院、1992年）１頁参照。

3　明の『宛署雑記』民風にこの日男子は艾葉を戴頭するのに対して「婦女、蜈蚣・蛇・蝎・虎・蟾を画きて五毒符と為し、釵に挿す」という。

4　『史記・孟嘗君伝』曰：“文以五月五日生。嬰告其母曰：“勿舉也。”其母窃举生之。及長、其母因兄弟而見其子文于田嬰。田嬰怒其母曰：“吾令若去此子、而敢生之、何也？”文頓首、因曰：“君所以不舉五月子者、何故？”嬰曰：“五月子者、長與戸齊、將不利其父母。”

5　今の湖南省長沙にある。

6　『礼記』月令、仲夏の条に「大いに帝に雩するに盛樂を用う。即ち百県に命じて百辟卿士の民に益ある者を雩祀せしめ、以て穀実を祈らしむ。」とあって、雨乞いの行為が行われたと考えられる。

7　「水の神々」鄭正浩。(『月刊しにか特集―道教の神々』所収, 大修館書店、1997年１月）

8　『荊楚歳時記』（宗懐、守屋美都雄訳注、東洋文庫、1978年）153頁。

9　前掲『荊楚歳時記』153頁。

10　『後漢書 禮儀志』曰：“仲夏之月、萬物方盛。日夏至、陰氣萌作、恐物不楙……中略……故以五月五日、朱索五色印為門戸飾、以難止惡氣。”

11　『風俗通』曰：“五月五日、以五彩絲系臂者、辟兵及鬼、令人不病瘟。”

12　『詩経』王風、采葛に「ここに艾を采らん、一日も見されば三歳の如し」という詩があり、艾をとる風習が古くよりあったことが分かる。『楚辞』の離騒篇には「惟、

此れ党人其れ独り異なり、戸ごとに艾を服して以て要に盈つ」とあり、艾を帯びることによって悪を避けるものと考えている。

13　『玉燭寶典』巻五引『風土記』曰：“仲夏端五、……裹黏米一名粽、一名角黍、蓋取陰陽尚相苞裹未分散之象也。”

14　『歳時廣記』曰：“端午、都人畫天師像以賣。又作泥塑張天師、以艾為頭、以蒜為拳、置於門戸上。”（引『歳時廣記』畫天師）

15　『燕京歳時記』曰：“毎至端陽、市肆間用尺幅黄紙、蓋以朱印、或繪畫天師鍾馗之像、或繪畫五毒符咒之形、懸而售之。都人士爭相購買、粘之中門、以避祟惡。”

16　『太平御覧』巻九百九十九、百草部、菖蒲の条所引の『風俗通』に「菖蒲花を放つ、人得て之を食えば長年なり」とあり、菖蒲が辟病や長寿の力の源になると考えられたものである。『抱朴子』巻十一、仙薬に『孝経援神契』に曰として、「…菖蒲は聡を益し…」とあり、また同条に「韓冬は菖蒲を服すること十三年にして身に毛を生じ、日に書万言を見て皆之を誦せり、冬祖ぐも寒からず」とあり、菖蒲が人を聡明にするものと信じたのである。

17　『夢粱錄』重午節曰：“内司意思局以紅紗彩金子、以菖蒲或通草雕刻天師馭虎像於中、四圍以五色染菖蒲懸圍於左右。”

参考文献

『荊楚歳時記』　宗懐　守屋美都雄訳注　平凡社　1978年

『礼記』上　竹内照夫著　明治書院　1971年

『史記』九（列伝二）司馬遷　水沢利忠著　明治書院　1994年

『清俗紀聞』　中川忠英　孫伯醇・村松一弥編　東洋文庫　1966年

『燕京歳時記』　敦崇　小野勝年訳　東洋文庫　1967年

『中国の年中行事』　中村喬　平凡社　1988年

『中国の民俗学』　直江広治　岩崎美術社　1967年

『端午の礼俗史』　黄石　香港泰興書局　1963年

「中国の年中行事」　中村喬　『月刊しにか』所収　大修館書店　1994．12

「水の神々」鄭正浩　『月刊しにか特集―道教の神々』所収　大修館書店　1997．1

『中国文化伝来事典』　寺尾善雄　河出書房新社　1993年

『中国の自然と民俗』　田中克己　研文出版　1980年

『神々の祭祀』　植松明石編　凱風社　1991年

『北京風俗大全』　羅信耀　平凡社　1988年

『字統』　白川静　平凡社　1984年
「茅について」 大形　徹　北大出版会 『照葉樹林文化論の現代的展開』所収 2001年
『新北京歳時記』　中野謙二　東方書店　1986年